

戦争史日韓学術会議参加報告（平成16年度）

葛原 和 三

1 研究会の概要

日韓学術会議は、平成16(2004)年11月18日、初冬の気配漂うソウルの戦争記念館にある韓国国防部軍史編纂研究所において行われた。この会議は、平成12(2000)年から防衛研究所戦史部と同軍史編纂研究所との間で相互の歴史認識を深めることを目的に検討が始められ、第1回は、平成14(2002)年から「朝鮮戦争と日本」を中心テーマとして交互に開催され、韓国で行われるのは第2回目になる。戦史部からは林吉永戦史部長、庄司潤一郎第1戦史研究室長、葛原和三所員、芦田茂所員が参加した。さらに訪韓中であった武貞秀士防衛研究所図書館長、前防衛大学校助教授の田中恒夫氏が参加し、韓国防衛駐在官鈴木洋志1陸佐も陪席した。

主催の韓国側は、安秉漢軍史編纂研究所長以下の研究員、大学研究機関の研究者の他、白善燁將軍をはじめとする退役、予備役の将官など約50名が参加した。

発表は日本側から、葛原・芦田所員が、韓国側からは南先任研究員の計3名が行った。総合討議においては、日韓の基地問題や警察予備隊の創設過程に関して率直かつ活発な意見交換が行われ、年を重ねるごとに歴史認識の理解が一段と深められたものと思われる。

2 研究報告

会議日程については、下記の通りである。

・ 挨拶 (1400～1410)

安秉漢軍史編纂研究所長、林吉永戦史部長

・ 第一部 (1410～1600)

「朝鮮戦争と日本－日本における米軍戦力と基地の展開－」 芦田茂所員

「朝鮮戦争時の駐日米軍の韓半島展開」 南廷屋先任研究員

・ 第二部 (1620～1720)

「朝鮮戦争と警察予備隊－米極東軍が及ぼした影響－」 葛原和三所員

・ 総合討議 (1720～1820)

議長 金幸福戦争史部長

第一部は、現在日韓両国で焦点となっている米軍基地問題に関連して「朝鮮戦争と日本－日本における米軍戦力と基地の展開－」について芦田所員が発表し、次いで「朝鮮戦争

時の駐日米軍の韓半島展開」について南前任研究員が発表した。

芦田所員の報告は、日本の敗戦を起点として昭和35（1960）年日米安全保障条約改定までの約15年の期間において、沖縄を含めた日本での米軍の動向及び基地の変遷を朝鮮戦争の影響との関連を主眼に考察したものである。結論として、朝鮮戦争は対日講和を加速し、日米関係を規定する日米安全保障条約及び国連軍と日本政府間の地位協定を締結させ、朝鮮半島有事を前提として、米軍戦力及び基地の展開を規定したと云ってよい程に多大な影響を与え、その政治・軍事の基本的枠組みは、日米安全保障条約を根幹として、今日においても継続しているとの考えを示した。今日、東アジアにおける米軍の再配置が議論されているが、本研究は、朝鮮半島を含め、東アジアにおける安全保障上の今日の問題あるいは将来の戦略環境を考えるに際しての原点ともいえるテーマであると考えられる。

これに対し、南前任研究員は、戦争勃発から間もない6月29日のマッカーサーの視察後、7月2日から日本に駐留していた米軍4個師団が板付にあった第5空軍の支援のもとに迅速に韓半島に展開し、京釜道沿いの遅滞行動と釜山橋頭堡での防御、さらには仁川上陸作戦による攻勢転移までの日本からの各師団の移動展開手順と作戦的効果及び全般戦況への貢献について部隊毎に発表した。南前任研究員の発表は、芦田所員の発表に接続して駐日米軍の韓半島への派遣とこれを支援する日本の後方基地の各種機能を体現した戦例として今後とも価値を有するものと考えられる。

続いて第二部においては、「朝鮮戦争と警察予備隊—米極東軍が及ぼした影響—」と題し、葛原所員が朝鮮戦争を遂行中であった米極東軍が、予備隊の形成とじ後の発展にどのような影響を及ぼしたのかについて発表した。その発表要旨は、朝鮮戦争による切迫した戦況、特に中共軍の本格介入は、治安警察部隊として創隊された警察予備隊の性格を国土防衛部隊へと大きく転換させる軍事的要請となり、米式重装備の導入とこれに伴う大佐級を含む旧軍人が復帰した。この結果、積極的な米式作戦思想の理解が可能となり、この日米の思考過程の共通化を出発点として今日の日米共同の基礎が作られたと発表した。

本研究は、警察予備隊と同様に米軍事顧問団の指導下に軽装備の治安警察軍(Constatulary)として出発した韓国国防警備隊の発展史との比較に資することが出来るものと考えられる。

総合討議においては、防衛研究所からの発表に対して活発な質問及び意見があった。芦田所員の発表に対しては、朝鮮戦争勃発以前における米国政府の対日政策、米国だけではなくソ連・中国など連合国の動き、米国の東アジア戦略、及び今日の日本の防衛力のあり方に係る質問などがあった。これに対して芦田所員が回答するとともに必要な補足を林戦史部長が行い、充実した討議が行なわれた。林部長は、日本の防衛力のあり方に係る質問については現在日本において行なわれている議論あるいは論点を正確に把握する必要がある

る旨の説明を行なったが、日本の防衛政策及び防衛力に対する韓国側の関心が高いことをあらためて確認した。

葛原所員の発表に対しては、白將軍から韓国軍創設期における米軍事顧問の影響について説明があり、当時韓国軍は、警備行動から戦争まで直結していたが、これと比較して警察予備隊は「5年間の軍事的空白」があったことに大きな差異がある旨ご意見をいただいた。また、他の退役將軍からは、旧軍人が果たした個別の役割について質問があり、さらに今後、日韓の旧陸軍軍人が、米軍の作戦思想をいかに受容し、組織の形成と発展にどのような影響を与えたか、さらには朝鮮戦争後の日韓の作戦思想等の発展について比較すれば興味深いとの指摘があった。

3 全般所見

本研究会が開催された戦争記念館は、戦没者の顕彰施設としての性格と戦史研究の中核としての機能を併せもっていることから、全般に「歴史」と一体となった雰囲気の中での戦史研究が進められているという印象が持たれた。しかしながら、研究会そのものはうち解けた和やかな雰囲気で行われ、安所長からは、「出来ることから始めましょう」という趣旨で、同研究所が発刊している『軍史』への日本側発表者の論文の掲載、同研究所が来年度計画している日米韓 3ヶ国による朝鮮戦争に関する国際シンポジウムへの招聘及びこれらの充実に資するためにも、さらに今後インターネットによって研究員相互が輕易に意見交換をしたらどうかとの提案があった。

林戦史部長からは、日韓の歴史認識を深めるため、日本の「武士道」と韓国の「花郎道」の起源に遡り、両国の共通性や特色などから比較すれば、さらに興味深いという提案があり、両国の交流を促進する方法論や今後のテーマについての意見交換は、歓迎夕食会の場においても続けられた。

今回の会議への参加を通じて、研究を推進する研究者相互の意志疎通の重要性についてあらためて認識するとともに、どのような問題意識をもって研究しているかについて相互に理解し、テーマを出来る限り共通化していくことが重要であると感じられた。

(防衛研究所戦史部所員)